

—短歌—

◎春のはじめ

柴

舟

日の光ぬくきがいと嬉しくて残る雪ふむ草の芽をふむ
うれしくも春こそ來つれ道の土いと滑らかになりもゆくかな
おとなしう坐りてまたも考ふる少年の日におもひつること
ほの黒う塵にまみれて残る雪残らではあらぬ事の悲しや
そは何のためぞと問はじ黙すべき事してありきあはれ朝より
心より今まだ人をにくみえず事としあればほほゑみて見す
堪へがたくわれの歎くを誰れにしも見せぬは何か物ぞ足らはぬ
いくばくも生くといふにはあらじかし心のままの一日もがな
何をみむためといふにはあらねども高き窓をばあけ放ちぬる
この心似るものぞなき大空の雲といふども形ありけり

新芽

賛助員

ひ

で

黒き土かへして出づる芍薬の赤き新芽のなつかしきかな
芍薬の赤き新芽の事なげにすらくのぶるうらやましさよ
芍薬の赤き新芽をぬらしては土にしみ入る春の雨かな
月の夜はかの學び舎のなつかしく歌うたひつゝ校庭をさまよふ
月の夜は悲しなつかしいく千度變らぬ影と思ひながらも
月清く静かなる夜や幾人か吾に同じき思なるべき
この朝げすらくかきしはおるごのちようくのあどもまづ心地よし
春の雪かゝるかまゝにまかせつゝよき衣濡らす心おごりよ
春の雪心地よしなど云ひなから逆上せし顔をさらしてぞゆく
別れきて心落ち居ぬ汽車の中音なく春の雪は窓打つ
日毎く八時となれば吾くゝる門の柳よまたもえいでぬ
生きてありやなごゝ傷つけためし見し柳はもえて三度春來ぬ
何時しかに草もえ出でぬ鳥なきぬこの天地よなほ生きてあり
吉備の國野邊は青みぬおほごかに我心なほ冬こもりせり